三味線志附録

雜綴

筠庭雜考抄書

洋学文庫
文庫8
A 152
2

三味線志附録雜綴

[illegible]二十七画ノ部ニ[illegible]

[illegible]

[illegible]

三画[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大槻文彦

平家琵琶ノ調子

石村検校、小弓ヲ揮リテ一三ハ但ニ琵琶ノ如ク三ハ琵琶ノ三ヨリ二調高シ
トイヘリ　ラヘイカモ二上リニテ三ノミ二調高シ
三絃ノ三ハ細ケレバ一二ニ合スレバ倍高キナリ

一 ㊁ 三 四　三味線ノ二上リ
一 二 ㊂ 四　三味線ノ本調子ニテ二ノ少シ下ル

胡弓ノ三ノ絃ハ継シテ同調ニ綜シテハ[redacted]八橋検校ナリ五代将軍時ノ人
ナリ夫レモ関東ノミノ事ニテ名古屋以西ハ今モ三絃ナリ

二上リ調ノ唄ハ関東ニ多シ

隆達　小唄　破れ菅笠　本調子
一度切ニ合スルモ　後ニ三絃ニ入ル

長唄　之ニ三下リ
ヨヒハコテ　モチニハバ　アサリマブネ　全体三下リ

語リ物　本調子
二上リ三下リヲ調カハリト云

元ハ但のし
琴ニ合セテ三絃ハ大抵三下リ

生田ヶニ筑紫方唄ヲ琴ニ合スルハ
元唄ノ調ナリ

三味ヲ弦又　名人互角録

堤琴ノ唯ク何ル　猫ノ皮ニ非ルカ

麦茶　兆茶
カヌこ茶　統ハ深マコート
里　勝　袖爪カクエリ　大短キ　為袖
鐘花筏ヲ旋
個ヲ全体ニ手キニテ
笹筏

三味線志

仮名世説 八丁 百事述其の 足薪翁記 三 同上

柳亭筆記 同上

江戸三吟 同上

世事百談 上の 世事百談ノ三

甲子夜話 八丁

図 温知叢書ノ 奈良柴 藝の花 本朝世事綺談

八水随筆の

三絃考 松屋叢考ノ二

百家随筆ノ 仮名世説ノ八ページ 三絃ハ近比

川嶋千覚元ノ 筠庭雑考ノ三 胡弓、上方ニハ三絃

史学雑誌 四十四ノ 浄瑠璃考 國學院雜誌 十五ノ六 四十三年二月 三味線ノ音律

日本楽曲志 一冊 如電先生著

當世武野俗談 燕石十種ノ二、藤植検校事アリ

早稲田文学 四十年ノ十二月号 大奴佐 音曲大全ノ事

雍州府志　筑箏琵琶三絃

人倫訓蒙図彙　琵琶琴三線同職

室町二條下ル長江又金兵衛二條上ル（近江

神田氏二家アリ室町通竹屋町上ル町神田七左衛門

（今井氏二家

下二條通室町西へ入ル町今井掾熊

[illegible]大坂[illegible]大全[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三味線[illegible]

昭和書寺中山
壽美成が其蔵の記
下ニ引ク所

うらみの介 上 慶長九年

ころはいつぞのこと成に慶長九年の夏の末云々いまやうの三尾線の轉手
きりゝとおしまきし糸を調てかんをとりあいのてひかせらるゝさゝめやしやみせん
のけつかうにて心詞ものべがたくしあそびの屋の所まて雲井のかりの音信(オトヅレ)て翅
を並べて古郷へ帰る気を蒔繪にすさて糸くらの左右に日月をあきら
かに白がねにて顯すさまの下りにて世中も夢か現かうつゝも夢と
も更にわかれなけれども といふ歌をかなもじにて書にけり

甚五の花川

狂言記外五十番　一

昆布賣二　今度ハ浄瑠璃ぶしよられ○アト是もうつてきかせのた
ぶうり、心得た、つれてん〳〵、てれ〳〵てん、まづ是が三みせんのさゝろもち
じや

筠庭雑考二ニ 来得が吾吟我集の自序ニ 慶安二年

ましせんの糸のよろしくも絶えを明ける是まさきの歌を集めて

なむ里うきうと名つけたりける

假名世説

蜀山人　百家説林中ニ有ノ八

三味線の作ニ古近江と称するは二代目善兵衛なり（喜多村節信云五代目ノ誤）中興近江も名を得し三絃師ハ他の細工人の及ぶ所にあらず元ハ柏屋近江と以て鼓の胴打なりし夫より私に工夫して三絃の胴の内ニ一鉋の削りかたを工夫して是秘なる所なりこの鉋目の妙をもつれの音を清ふするなり凡さみせんハ此三筋の糸を以てもつれの調子へもかなふハ妙なり他の三絃打のおしらへざるハ一二三のさはりの善悪によりて古近江がうちたる三絃ハ楽器ニ合ふ事妙に

山崎美成作、天保十三年作

世事百談

百家説林中四書ノ二十四

三味線はもと蛮楽の器にて、琉球にて專ら翫び、海蛇皮もて張りたれば世俗にジヤヒセン（蛇皮線）といへり、文禄年間瞽者石村検校それが弟の平兵衛といふものとおなじく琉球国に渡り、兄の検校は其曲を習ひ、弟はその製作をまなび得て帰り、石村平兵衛はじめて三味線をうちたり、そのかみは寸尺定まらざりし、さてかの石村検校が琉球にて習ひたる唄

チヤウリヤウ。フリヤウ。ソレヒヤウフニ。リヤクニ。イヨアリヤヨイ。フリ
ヤウソレルリヒヤウフリヤウ。

このうたの三味線の手にて、石村検校のはじめて作りたる唄

ちよの始のてんは照る月ハ。十五夜が盛りよの。あの君さまハ。
ぞとさかりよな。
検校これは七組の曲を作る琉球組は其中なりこの時猶三味
線の寸尺定まらずして一二三とは上駒をかけざりしが、それハ弟子虎沢
検校新に六組を作る。其後柳川検校はじめて三味せんの長さを
二尺一分と定む。其の弟子浅利検校佐山検校市川検校などみ
な三味せんの名人と称す。ことに佐山検校の端手七組を作り、手事
とふことをはじむ。かつ二上りの調子をはじめて弾き出だす。若みどり
といふ唄二上りの調子のはじめなり。其の後連川検校一下りの調子を
引きいだせしとぞ。

本手組十三組端手組七組あはせて二十組なり。今も京大坂まで
法師のあそびにて、やんごとなきあたりの好ませ給ふか、あるひは
神佛の法楽などにて弾ずるとなし、みだりになまこくの人の弟子弾きて聞かせ
ることをゆるさず。強ひて所望あれども復きとて弾くなり。其法師と云ふ者
ハ四谷の瞽者にて芝居狂言などの浄るり小歌をバ座敷と唱へて弾くにて
ことかくいましめることとなり

- 石村検校—虎沢検校—山野検校
- 石村[illegible]
- 柳川検校—浅利検校—伊豆検校—岩崎検校—河村検校
  - 佐山検校
  - 市川検校

琉球国にも専ら三味線を翫ぶよしなり。京師堀河なる南涯と云ふ
人、天明のはじめ薩摩国にあそびしころ、琉球の喜屋武親雲上之襄鴻基
字ハ延徳と云ふ人三味線を弾き、富川親雲上之紹康通字ハ隆嘉
と云ふ人、小歌を唄ふをきける時の筆記とて、ある人の見せけるを

「きよのほこらじやなの。おれがなたてろ。つまでなる（蕾）花なの。つゆけた（露）だと

此の歌も祝儀のうたにて、始めをそろへて唄ふよし。高砂の謡をうたふが如し
とぞ。又、まても子のぞ子二人にてうたふ小歌

「さのへのうちに。つぼみて（蕾）つゆまちよ（露）。うれしくもさく（咲）のはなやなる（花）

「ときわ（常盤）なるまつ（松）のかなるもあきで。まいつもまりそいるぞまさる

「うれしさよ。にえ（庭）のたけ（竹）のふしぶし（節）に。きみ（君）がよろづよ（萬代）のよそひ（齢）こめて

「むかしうらめたろん。あかつきのとりん。今としになるをこふふあなや

「つき（月）やむかし。つき（月）やなが。かわてぬや ひとごころ（人心）

「つきひ（月日）かさ（重）なれど。とし（年）やよすれども。忘りまける いぞたびのそら（旅 空）よ

「たび（旅）やまやまとり。くさまくら（草枕）こころ（心）ねても（寝）わする（忘）らまんそかおぞえ

その弾くところの三味線ハ、我が邦のものよりも三四寸も短く、棹ハ紫檀
黒檀なり。皮ハ海蛇皮なり。調子ハ大ニ高く、声もあハせず弾くやう
に見ゆ。手ハいたつて繁手なり。なかく我が邦の如き妙手ハあらず。伊勢
のあひの山なるお杉お玉のひく三味せんにや、似たりとぞ。

工工四（クンクンシー）

沖縄ニ三味線ハ四百年前ゟ

三味線ト書レテ　サンシントヨブ

調子ハ本調子ニ上リ、三下リ、一上リノ四ツアリ

絃の胴ヲ地、棹ヲ人、海老ヲ天トヨブ

中子先ヲサルノテ、（三ミテ小サシ牛ナリ）駒ヲウマ、上駒ヲウマグチ、

糸巻ヲカラクリ（俗ニカラガイ）

（内地ヨリモ短カリ）糸ノ絲ノ太サ十八

胴ヲ蛇皮ニテ四面皆包ム、皮ハ支那ヨリ来ル

撥ハ海馬ノ牙ニテ作リ（象牙ノ如し）人指ユビニハメテ弾クノ

琴ノ爪ノ如クシテ甚ダ大ナシ

胴

精園ノ

右沖縄ノ三味線手明治四十三年十一月十七日東京ニ来テ平安ヲ携ヘテ女士也ノ歌演奏ノ時旧琉球王侯ニ属スル尚家ノ家令ナル家扶ナル護得久朝惟ニ聞テ記ス

文彦

三味線ヲ蛇皮線ナドヽ言ハズ最初ヨリ絃三筋ナリ

ラベイカノ名知ラズ琵琶月琴ナシ

胡弓アリクウチョウトモ云フ

出羽運理ヨノ天ニ照ル月ハ十五夜ガ盛リあの君さま

ハ若ザカリヨノ歌ハ沖縄ニハナシ大島ニテ唄フト云

三十九
二一四

三味線志出版仕度ニ付伺

私儀先年本校ニ奉職中命ヲ奉シテ三味線志ト申一書編纂係ニ有之候処今般右草稿ニ増訂ヲ施シ候ニ付私版トシテ出版仕度候差支有之候哉此段相伺候也

明治三十三年十月五日

下谷区上根岸町百十番地

大槻文彦

東京音楽学校長渡辺龍聖殿

三味線志らべ之部追申

先ニ奉伺候三味線志らべハ何ニ属スベキヤノ旨ハ
凡ソ参百部摺立テ一部ニ付定価凡ソ金五
拾銭位ト見込ミテ出来ノ上ハ摺立高ノ一割
(即チ参百部ナラバ参拾部)御校ヘ寄贈仕候
心得ニ有之候此段追申仕候也

明治三十三年十月廿三日

下谷区上根岸町百十五番地
大槻文彦 [印]

東京音楽学校御中

三味線壱丁之追申

先日奉伺リ三味線壱丁ノ価格等ノ之節ハ
凡ソ参百円部拵立テ壱部ノ定価凡ソ
金五拾銭位ト見込ミ出来ノ上ハ貴校ヘ
弐拾五部寄贈仕ル為念ニ御追申也

明治三十三年十月廿二日

下谷区上根岸町百二十番地

大槻文彦 [印]

東京音楽学校御中

三味線志附録

筠庭雑考抄書

三味線志附録

筠庭雜考抄書

糸竹初心集 元禄四年刻
大ぬさ 貞享三年刻
色音論 寛永廿年書
紫竹集 同上
女重宝記 元禄五年刊
琴曲ありかきりんぜつ
三絃曲

圖ノ考

筠庭雑考 三 抄書

三絃

鳴器ハ一絃二絃三絃あり一絃ハ日本後紀延暦十八年七月庚午是月有一人乗小舩漂参河國云々後頗習中國語自言天竺人常弾一絃琴聲哀楚と見えたり又二絃三絃同じ器にて其絃定まらず（下に見ゆ）按るに三才圖會の阮咸ハ其状いとよく三絃に似たる物なれバさ様とり此圖ハ阮咸のもとの形なれあらじ故に三才圖會の其説を記す武后時蜀人蒯朗於古墓中得銅器似琵琶眞時人莫識之元行沖曰此阮咸所造命匠人以木為之以其形似月聲似琴名曰月琴杜祐以晋竹林七賢圖阮咸所弾與此同謂之阮咸云々四絃十三柱倚膝撥中摐

大槻文彦

王思義が其書を作し時

之謂之擘以代撫琴之艱今人但呼曰阮と見えたりされば
形圓く琵琶に已ともしりたへきはその製もさればかはらざりし
ていと異なるもの此器當時あることの說とり載たるなれ古
物の傳はらざりし事をしらざる此製と說とかなはざるより
よりてや寺島良安が和漢三才圖會には琵琶に似たる物
を製せり是をしらし故がり杜撰に作せる製にもあるべか
らずそのうち月琴とて渡りたる物あらむ今月琴とて清
商の持来る物と似たれども異なりさはしるに作りしその
欲王圻が三才圖會を作せる時にもいかになき物もなかりし
にや今世月琴といふその四絃なれども二絃づゝ同調にて

其实も二絃なると同し南都東大寺正倉院の宝物中に四
絃の鳴器ありしと古への月琴なるへしまた陸奥會津の
農家に四絃の器得し槽も今の三絃の槽の如く柄は三段
に續たり何この比の物なるか王圻が製をせる物の類と見ゆ
楊升菴外集に今之三絃始于元時小山詞云三絃玉指雙鈎
艸字題贈玉娥兒といへり然れども元史の樂志に火不思
制如琵琶直頸無品有小槽圓腹如半瓶榼以皮為面四絃皮
絣同一孤柱とありて三絃にはあらず但此物異名疏に湖撥
四長二尺許三絃といひし事物異名に三絃子と挙て其下に
胡不兒云蒙古といへり火不思湖撥四胡不兒ま渾不似な

と字たがふくにかけど皆一音の轉にておなしことなれ
れどヲ絃の數定まらねど阮咸を又同じ事物紀源に四絃十二
柱或三絃十三柱といへり今に異國より齎来る蛇皮をはり
たる三絃を北楷方圖にしるしからず半琵琶の如きものあ
り是もかはり面はばかり皮をはりたり五雑俎に有所謂三
絃者常合簫而鼓之然多淫哇之詞倡優之所習耳また廣東
新語にハ粤俗好歌凡有吉慶必唱歌以為歡樂云々其歌之長
調者如唐人連昌宮詞琵琶行等至數百言千言以三絃合之
毎空中絃以起止蓋太簇調也名曰摸魚歌或婦女歲時聚會
則使瞽師唱之如元人弾詞曰某記某記者皆小説也其事或

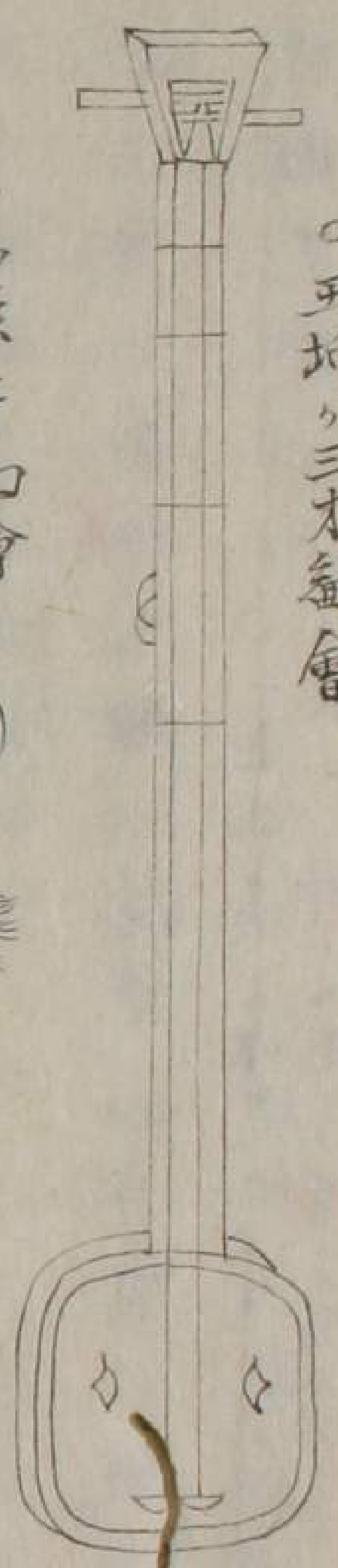
有或無大抵孝義貞烈之事為多竟日始畢一記可勸可戒令
人感泣沾襟ありとく浄瑠璃を語るとおなし元の代も東
狄なれど其本土の樂はいまた此器もとしは行はれたりと見
ゆるを北かみありし阮咸などは絶て後此器まじき胡國より
出来りしなり元の時に起るといふ説もあるなれり元の人
趙子昂が婦人管道昇がかきたる絵の巻物あり明の人紫
芝山人俞和が其絵に似つらはしき詞を書て繪の間ごと
にはしたる巻子へ繪ハ絹俞和が書ハ紙なり其中に三絃
子の圖見えたり

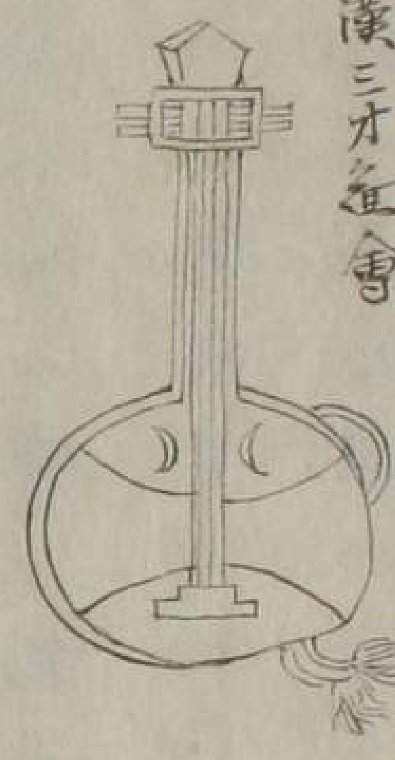
この畫ある故に唯是のみ摸しすり此巻子は某家に有しあるて外に考の有をまとうつしおきたれなくて
によつて其絃も人の為に奪はれて今は行方もありやなしだ

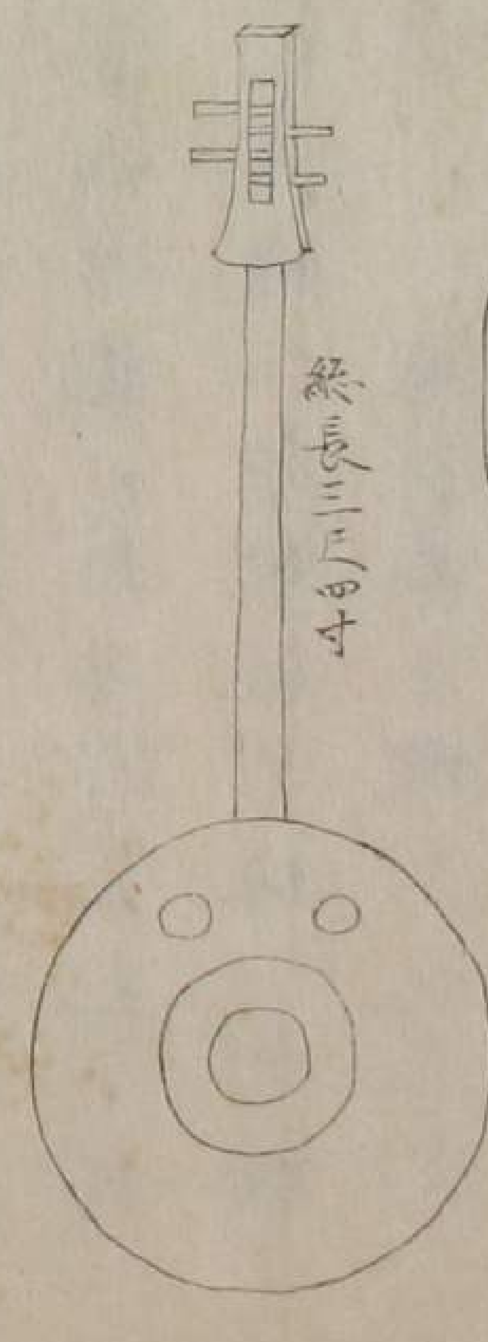
一

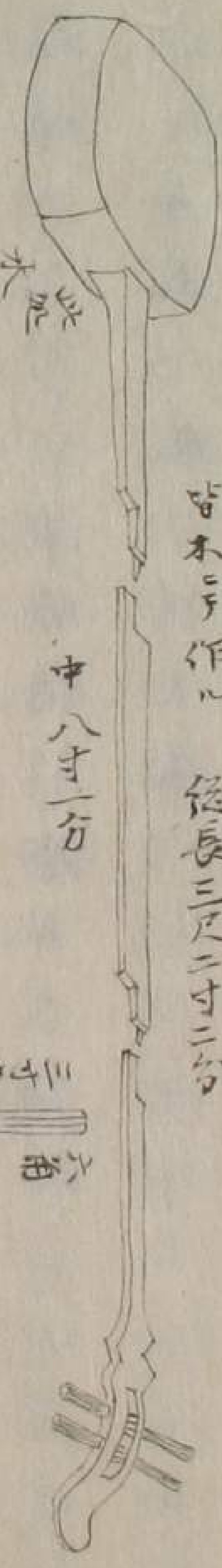
四ノ

阮咸圖


〇王圻ガ三才圖會
〇東大寺正倉寶物


〇和漢三才圖會


絃長二尺四寸


〇會津農家藏四絃圖 失邑名
皆木ニテ作ル
絃長三尺二寸二分
中八寸一分
此處木口
三寸九分
六角

○元の時の三絃子の圖

画者管道昇ハ

青浦縣志三十二巻列女上

管道昇字仲姫小蓮人嫁ニ

趙孟頫封呉興郡夫人工

詩善画云々

天水管道昇寫

新月掛梧桐正宵涼又到丹桂清庭蕭瑟秋色

置圍棋玉弄夜戲紅葡檀板和銀箏侑歡宴

承寵氣豪張情如湧青嬌覓嬌床拔劍揮星燭紅

秋思畫地風華同擅美星雲霧霏霏清光暮

惜更闌詠懷

右調紅林檎近

俞和書ニてまうるハしく

愛すへき筆也[illegible]

此ハ俞字ハ[illegible]と記し

三絃の吾邦ゑ渡りし始めハ糸竹初心集ふ文禄のころほ
ひ石村検校といふもしき法師琉球の嶋ふ至りて彼
島に小弓といひて糸三筋まてなしたるものあり小弓ふ
馬の尾を絃ゑかけて弾なれば小弓とはいふと聞て石村こ
れを探りミる琵琶を中はしける物へ糸の志く短かう
ゑ一二とびちの如く三の糸ハ細ちの三より又二調子ふ
ど高くひびきたるへと思へり處の者いひけるや此島に
て真蛇の多き所なるがラヘイカといふもの首く此まむ
しを食物とすればラヘイカ此鳴聲小弓の音ふ少しも
かはさる故ふ真蛇を退くれむが為ふ専ら弾くへしとも法師

も爰に逗留乃間たゝき給へといふ撥ちの後石村京都ゑか
へりくわしく琵琶をなつし此三味線を作り出せり琉
球の島より渇て来るをいふ心にて琉球組といふ事を作
り置る弟子虎沢検校に残らず傳へしかば虎澤かふ組破
手といふを作り出て虎沢より山井検校ゑ傳授して世
ふ廣まるといへりまふ神田貞宣といふ俳諧師浅草川舩
遊の記（此舟行明暦以前とおぼしき事あり）三味線の起りハ琉球より薩摩へ渡れし
り琉球ハ蛇多く有て民屋路次ふ横たはり女童を悩せて五
月雨洪水の頃ハ分て多く出てうるさかりしかどとし三味
線と小弓此音も恐れて寄不来を悦故男女共に此二種ぞ

樂み彼雜義をとめかれ或ハ一興をなせりけるや三味線ハ
蛇皮小弓ヒラヘイカといへり何の頃かこの國に渡り
日本にあまねくしまりて武江小歌ひて戀慕の道のよせ太
鼓とやら云々よる大幣にハ永禄年中琉球國より是をもたらす
其時も蛇皮にて張て二絃なりとの事なり泉州境乃琵琶法
師中小路といひける盲人に人のとらわけれハ云々長谷此
觀音に七日参籠し弾やうを祈りしにおもふまゝなる靈夢に
よりて一絃を増て三絃とせし哉ばくくして虎澤とい
ひし是と弾ける本手破手といふ事を定めて是哉傳ふ
其後澤住といふ盲人ありてこれを弾おぼえ歌にのせて

万治寛文の頃ニ八橋ハ直ニ座頭

沢住或ハ沢角とも書けり

も哉出しより浮より公家武家のうちにも賞翫させ給ふ
方多く有てみつからも弾ちを給ふ其後ハ此器に緒をか
けて頭からけて引を用とそ云々浄瑠璃といふ事哉のせて
三味線を引初めしも沢住がなせる處なり然して後寛永
の初め攝州に加賀都城秀といふ座頭両人堪能なる事古
今に獨歩せり東武に至り加賀都ハ柳川検校城秀ハ八橋
検校となれり柳川流八橋流といふハ是なり此両人三味
線の鼻祖たり是によりて今世三味線の工人に八橋乃柳
川なといふを此名字を許されたる者也と有また松の葉
小歌のにも中小路より石村虎澤沢住と相うけてと載けり

大幣にハ石村なし竹斎物語に石村検校こそハ慶長の
頃なり然れども糸竹初心集に石村を文禄の頃の人といへ
るはいかゞへり大幣に中小路といふらくして虎沢といひし
とあれバ糸竹初心集に據るに虎沢ハ石村か弟子へ私の
葉に二人ともに非人たりしの説とも試合せ考ふべし
糸竹初心集にハ三味線を小弓よりといひ大幣にハ二絃
なりしを一絃添たりと有て其説おなじからず諸説を造
り改めて新たに引出したるやうにいへるなど以ての外なり私
説なりけるとなり三絃子にて琉球國の弾やう我習ひて其
後さまぐ弾出し術も其器物も彼よりハ勝れし事となせ

るゝ小弓も二絃とその始より渡りて有し事ともあり二
絃三絃四絃みな有しものゝ琉球より傳はりけるよしハ琉
球組の歌あり未得が音吟我集の自序に慶安二年 上書 さみせんの
糸のよりくに絶なぞ有ける是よりさるの歌を集めるか
むかしさうと名付たりけれどハいへり其器も早く
渡りしも有へけれど世のさたとしもなくふるく詠ふ者も
そこなく然ひきおぼえたるものなれどいなりやしや文
禄よ至りて石村よく弾出し者故始めなりと見えたりその
かみふれ有しことを室町殿日記十九悪徒の事ちいひて遊
女二人を中に置て何心なく三味線を弾て遊び居けり 文文 永禄

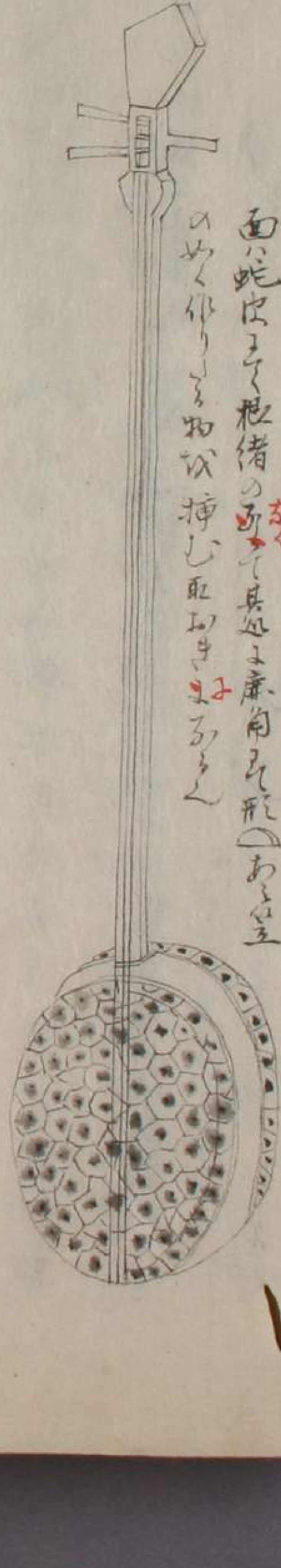
○以下、石村氏ノ事
未ダ自稿ト見合セズ

頃の日記あり　また狂言記外五十番此内昆布賣口にやみせんにて
上るりぶしに昆布賣といふと見ゆ（狂言は古きものなれとこれしハ最後に出来しなり）義残
後覚に三味線鼓にて大踊をする事有（此書文禄五年の跋あり）醒睡笑（永禄ころのものなれ共）
都の人あづまの宿なる女にしやみせんをとらせたる物語
あり又慶長ころ此物にハ仁勢物語（光廣卿の戯作といふ）むかしと平
家をあらばしやみせんをひいて小歌をいひて過る紀恨
のなげ草子には雪の節といふ上﨟三線ひく所其三線華
美を尽しかざりをいたりさばかり世にもてはやす
物となりしかど、お國歌舞妓をもいまだ是を用ゐずして舞猿
楽等ばまねびたれば人の此器をも蛇皮など蒙て製作いふべく

ぬつゝかなりしをいゝふくよく作りなほして中にも石
村より勝れたる器を出来て古近江が造りたる彼世にも
らな貴宝とそめり元祖近江を稱を源三といひし京師の
人なれと今ハ墓所も定かならずされば実名さへわすれたといへ
る按るに近江といへるが通称なるべし　文この家石村氏
なれば石村検校が子孫か又ハその名字をうけたる歟（柳川八橋）
（得て柳川八橋と称せしが彼のいゝ鳴器を作れる近人その由るし歟）近江が子孫江戸に来て世々その器

○芳宗偶録に高孟彪が印譜の古帖を見しに二弦の図あり穆王見王母図銭穀画と有
てこれを画せりおもふにもとより設けたる図な
れば画者の意工なるべし

○琉球より渡りし三絃　古物にはあらで近時の製なり



中山傳信録六巻　三絃柄比₌中國₋短三寸餘彈撥惟用₌食指₋とあり

本邦の三絃に比ぶれば柄四寸許短しある人云三絃に張れる蛇皮はエラブウナギの皮なり至て大なるもの有といへるはうけがたし本草啓蒙に蛇皮は琉球國使畧に海蛇とあり是は琉球の屬島に沖の永良部といふ

處の海に産して食用とし其皮刀把及鞘を包むに用ひ又別に至て大なる蛇皮あり淡褐色にして黒斑あり用ひて三絃槽に鞔これは飯匙倩の皮なりといへり飯匙倩は彼國にてハブといふ蛇なり蛇皮を樂器に鞔は古き事なり唐書樂志に高麗伎云々琵琶以₌蛇皮₋為₌槽厚寸餘有₌鱗甲₋楸木為₌面象牙為₌捍撥₋畫₌國王形₋又有₌五絃₋云々見えたり

を作る今その家譜と墓碣などに據て其時代を定むべし墓は三田の大信寺にあり古き墓碣は上の右缺けたり

寛永十三年三月二日
行誉浄本信士
明暦三丁酉八月廿五日
正誉道薫信士
元禄九年正月廿七日
実誉浄真信士
正徳六丙申正月九日
還誉本立信士
元禄八亥六月十八日
西誉永欣信士

宝永五十一月九日
法誉性真信士
元禄九年十月二日
廣誉源智信士
宝永七九月晦日
教用院浄玄信士
正徳二年七月五日
心誉昴還信士

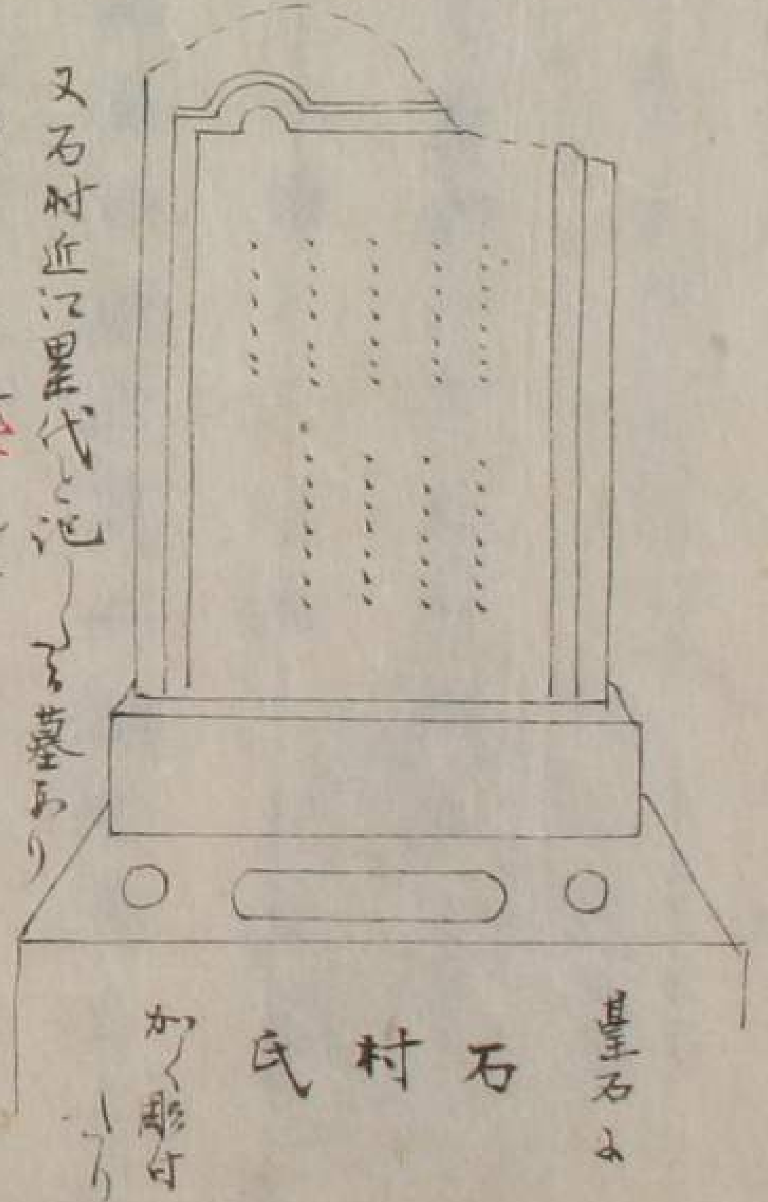
石村近江累代

石村近江 住京都 墓地未詳
道薫信士
性真信士
相流信士

浄本信士
浄心信士
本立信士
倫超信士

古近江九代孫
春峰孤雲信士
天明七年五月廿二日
俗名太兵衛忠豊 石村氏
旁ニ 孤雲深きを伐りて月を得 鳳尾
苔むすと筆て梢から捨こら尖
十代目近江 文化元年月十九日
月峯秋善信士

又石村近江累代と記して墓あり
これは後に建たるにて又別に各自が墓石あり



墓石に かく彫付けり

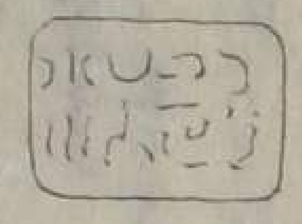
二代浄本俗名源左衛門始て江戸え来るに依て江戸元祖浄
本近江といふ三代道薫 浄本より以下源左衛門と通り名とす 実名忠義四代浄心 墓碣に浄
真と有心字の誤りなり 実名忠政五代性真実名忠次俗名善兵衛といふ此
時より作出し三絃に焼印を用ひ始む此人総髪なりけれ
どせに惣髪善兵衛と云六代本立実名忠貞七代相流実名
宗忠六代迄の実子相続して七代に至り男子幼少故弟子の
内より宗忠といふ者七代めに続たり八代倫超実名忠睦
俗名善五郎六代忠貞か実子也九代春峰実名忠豊俗名太
兵衛近江と称せる是なり十代目秋元但馬侯好事にて名
近の家絶む事を惜ましく扶持をうけしめし也右の焼印相
傳して六代ころふいたり損へたるふよりて七代の時今の

△此記蜀山人ノ假名世説ニモ出デタリ
百家説林ノ假名世説ヘ

焼印に改めけりとぞ此家の風にて三絃の棹の裏に鼓の
胴の鑢(ホリ)かけに似て綾杉といふを此に造出り焼印ハ根緒
おくる処の下に押(ヲ)と常人焼印なく古近江にはなし
されども善兵衛まで近くて太兵衛が如き誠に名手の聞
え高く祖先に恥ざるものなれは新古流れて工拙を論ず
べきにあらねど △或ものに云二代め善兵衛といふが古近江と称せる也之初代源左衛門二代(カツ山善兵衛とも)目善兵衛隠居して剃髪となり貞心と号す世俗かつさん近江といふ三絃に目録を付る貞心作三絃銘出雲八重垣妻籠以上三挺三絃ぜんざん山彦是を二挺 三絃と云大滝嶋戸鏡山松むし常盤雲井もちの離ぶしも百と号十二段いろは以上十二挺三絃と云と伝りいふく誤也初代ハ源左衛門なれば善兵衛ハ五代めにて二代めにあらず貞心とふは十代の内になし五代め善兵衛ハ性真人にてありて工がいとみごとなりし名前(名品)三絃の指て知べし 江戸
絃鹿子なとに京橋北壱丁目石村近江此外に石村河内石
村山城と有近江か家京師よりうつりて名匠と江戸に顕し

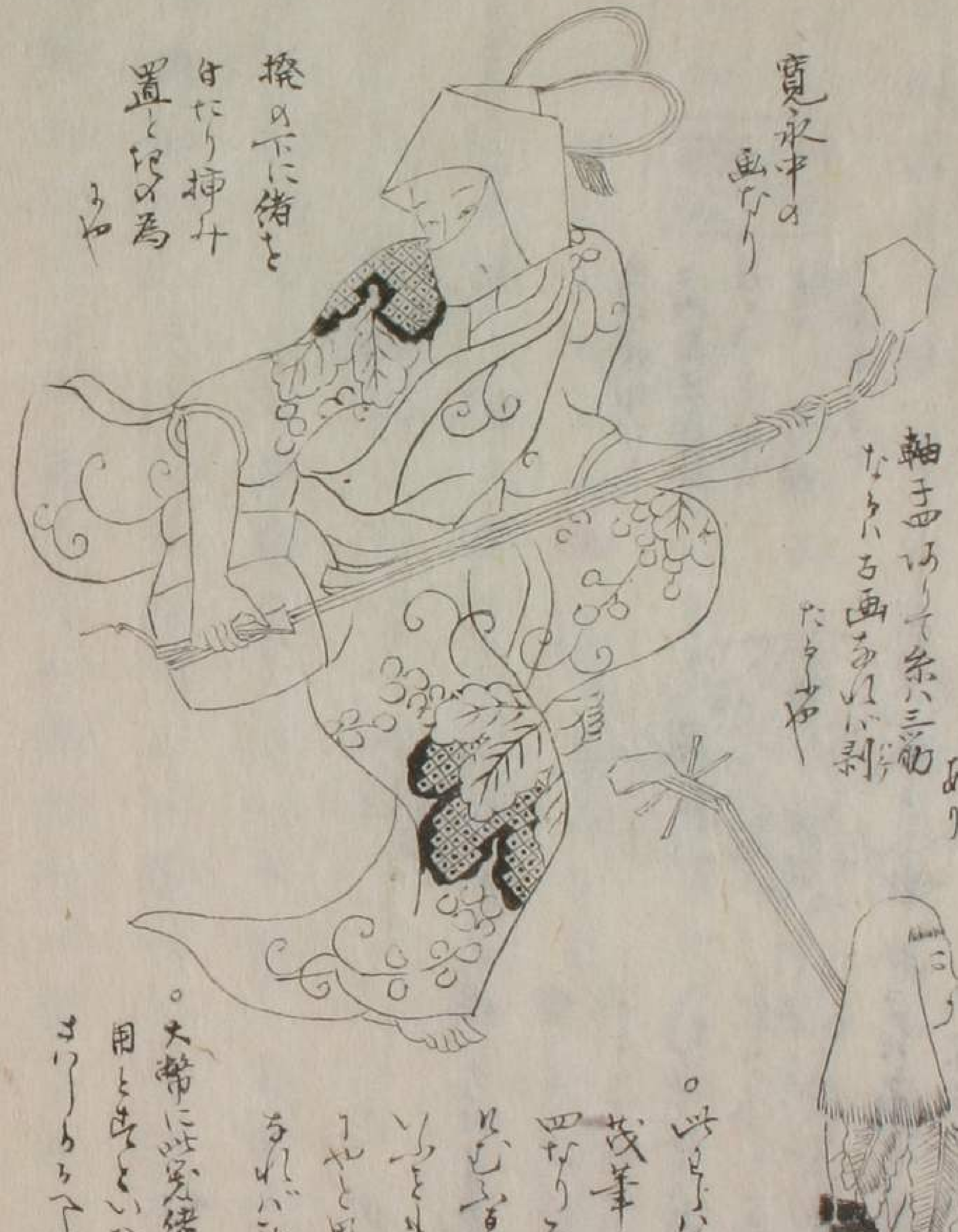
る風流つきしく草に何事も東(アヅマ)物ハやしくぬはどなれども
近江が三味線を恥るとといへる江戸なやみせん屋の中侍
し近江にかなるずいつもれ細工人も外より勝れて其
故ハ江戸の繁栄に付きしくの篭中なく方より高直にか
まいてもおまへお出る故なぜむつと其妙を得たり殊に近江
も古作の名人の鼓の筒うちのかんなどもよく考へて
やみせんの筒北内に一つのかんなめ代工夫したり是秘蔵
の事へ云近江からおや三せんいふるはそれ調子なりと
いひ自り総髪善兵衛などの時をいふなるむ焼印なき以前
の近江が作をいと稀なるべく又これ有ても後人誰かハ

あしむ北窓瑣談に新五郎物語あり六條本願寺に近江の作
刀三絃あり類なき名器也折々借し賜はりて是を以て少
しにても弾に無理あり按へ處は坪重毛にても違ふ時も
一向に鳴らず其坪に当り無理なければ神妙の音出る故
にはやまち明白に聞えて耳に立我ならぬ藝の不熟を覚
えられて器に對し恥かしく思ふよし語りき新九郎も三絃
にとりては妙手にて人こぞ知るところなり然るに彼三絃
などをいまさら不相應なりといふ事はしと有は三絃いつも
の近江のあしなれど初代には有へからば古代の三絃今
の製りやうとは異なる處多し一ッ二ッ写し出



近江が焼印なり
七代宗恵が時に
改め作りし印なり
るに似し古き印
は具家にほん

○眠のさけ草子　慶長九年九さし也
雪のあした御所　てんじやうしとおもし
ろきしいと琵琶の音てかんをとりあはせ
をこりせしるし給ふやさしさんのかうことは心を
やりの人あらし忍びの庵の所には雪井の庭
のおとつれてつま琵琶かへて古へ人の所を
まねぶるていよいよの左右には日月を
らふあつかひねてありがたしき



○此絵ハ古き六曲の屏風のきれはしの図の中にあり

寛永中の画なり

撥の下に緒をつけたり挿み置くと紐の為にや

軸子四ツ有りて糸ハ三筋なるハ古画なれバ誤りたるにや

○此もふるき図にて名画抄に出て光茂筆とあり是ハ鳴琴の軸手(子)四なりその外これをかくのごとくなれバ古くハ六筋ありけるにやと思ひしかどもふとき柄のふとさハ(とか)いやと思へどもあやしき音通の名なれバ初に名を有べからず

○大略に此緒をはて首にかけて引を用と申しといへる此緒をとりなと(子)ふまりしうへしいまだ知らぬの図を見るべし

○是ハ上に出せる屏風の絵の内の三絃 えひ尾の形同じ其上人物ハ遊女ならで山東京伝が美少年の男子といへり

いとをかし髪のさまハ上の女と同じやうにて候ひしなれバいかゞ見誤りたるにや

此二面絵模写之

○此立かに(此カ)男の画寛文年間の画と云ふ是も古き屏風にて紅葉見物の踊の画也

○法師ハ延宝年間吉原用文書の絵なり

えひ尾又様ん

これより糸かけの所より曲りたる今の形に近(近)し

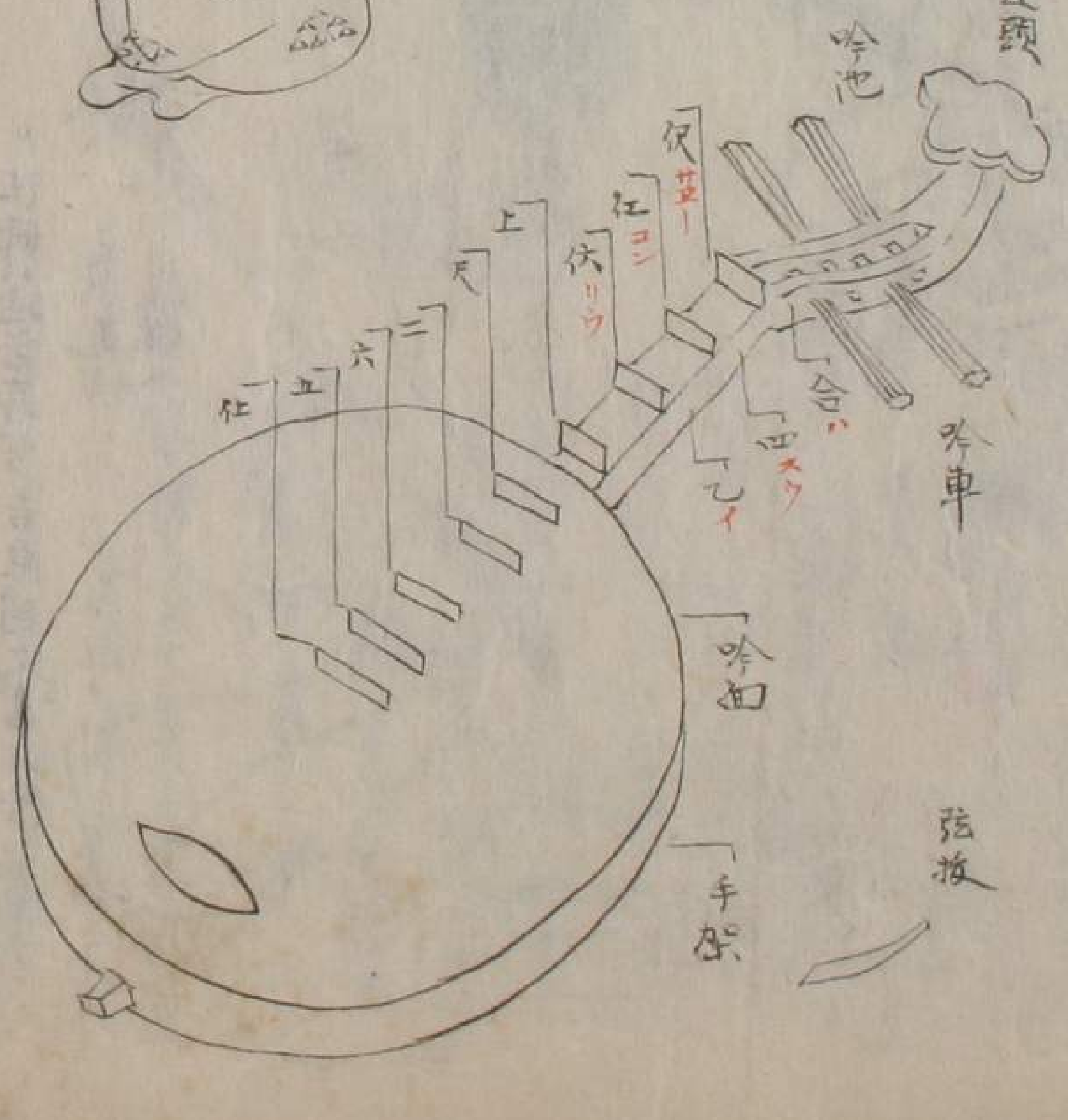
此撥ハ先の首ふとくとい(と)ひ用をなさぬにや

寛永より寛文のころまでの三絃えびお曲りしやうなる画と大に同し

○古は小肩にて胴高ありけれと
元禄初年なとまてあたらし
たる蛇皮の三絃よりくれぬ
柄も長く蛇皮のうすきもの
えらむ

○今の月琴の楕円
は鉄を薄く細長
くきりて磁石の
針のかく宙にあり
て動くやうにし
たる物あり是は
響膝と
名つく

○今清商のもちわたりて世に行はるゝ月琴
なり木はさくらの紅栗といふもの木理の如し



寛永ころの絵まかくの
ことく三絃ありこれ
画やうのもろこしふうあれど
そのころの製なり
或は又尾琵琶の如く
作りしもありけり

続さみせんハ神巻談苑に今世ニ続三線ありむかしハ琵
琶をも作まく続ヒもやぞ申けり長明方丈記ニ見えたり
といへり會津農家の四絃ハ古番続柄なれど三絃よりも
やもとり作きたりきれ有しがきさし西鶴が一代男比草子四巻

はぎさは黒たん六せうかけを取いだしてらうさいを弾

といふ、これらは（六筋がけといふを原本洞房語園に慶安の頃江戸町二丁目揚屋喜斎といひし者六筋かけとて其頃隠れなき三絃の上手なりし云々又八筋かけといふ也是ハ西鶴が置土産五巻に見ゆ）次でいふ云此ごろ新刻の書先哲叢談東涯

先生が続三絃の画をあらはしてしるしをくはへむるもしるされ

至余が傳へ聞しにも先生医師の用る百味だんすやうの

古き画を買て諸書より見出たるを或小さき紙にかきて其

類を分て是を入る器とせりといへれば誤れるにや続三

線はだみふした制度通名物六帖を作りたるは怪むべ

し此談も仁斎先生が妓家に入てその妓家なる或さわし

まりしといへるに同し（同書此談ありて又宮崎筠圃もこれに似たる事を載これも妓家を過ふる迄にて内に入しといふことなし）

いへりさらもて妓館と心付さる事あらんや実に是をさとらずんば至愚といふべ

しいはでも一家の学を唱へて儒宗ともいはるべき碩人を欺けるなれば悪むべしやがてみかく

にくむは事を称美せんは彼菅家を軍ふ

なり給へりといへるのみとし

鼓弓

鼓弓も三絃と同く琉球より傳ふ琉球にも毒蛇多しラヘ
イカといふ虫有て蛇を食ふラヘイカの鳴聲鼓弓の音に
似たれば蛇これを怕る鼓弓の製糸三筋なり糸竹初心集
に見えたり寛永の頃此絵につけたる鼓弓三絃にて槽円く
弓いと小さし慶長の頃石村検校能手にてありしにや竹
齋物語に又ある方を見ていけば遊女あふくん集りて酒
り此人々おもひしやみせんこきうにわや竹やなし
添たる其中に石村けんぎやう参られて歌のてうしを上に
あり云々見えたり此器かの虫の鳴声に似たればラヘイカ

とも呼とかや貞宜が浅草舟行の記に琉球にて三線も蛇皮
小弓はラヘイカといふ虫ありとよりラヘイカは何虫ぞ
しらねど蛇を食ふ虫は蜈蚣なれど鳴をきかず
宋書王素傳山中有蛩虫声清長聴之使人不厭而其形甚醜素乃為蛩賦以自況といへり蛩は馬蛩またヤスデといふ虫之本草に見夏月木に上りて鳴といへり又鶏犬に毒ある事はいへど蛇を避ることは見えず
中山傳信録にも琉球國志畧に蝎虎尤多作声如雀冬
夏皆然とあるも壁虎の類なるべし薩摩大島にへヒリといふ
物是なりといへり蛇を食ふやいかゞ李吟獨吟百韻に神
代よりこそ以勢細なり聲あまくこしは月もおぼろの弓張
て春臺獨語に胡弓といふものも三線のたぐひなれども
其音ものことにいやしけなる故にや好むものすくなく

○是ハ前にいふ寛永中の屏風の絵なり

寛永中鼓弓この形なれバ慶長の比も同じかるべし

○これハ世に出る紅葉見の遊山の図寛文年間のものと

此器寛文迄は盛に翫ばれしをなきが後に三絃にそのみを咄なると云ふべし

唯えくし法師非人の所作まてやみね袖ハ風俗を破るハどの事なし和漢三才圖會に鼓弓拵於南蠻といへり南蠻やうといはこれをさとを辨へかふし唐うしを南蠻胡枡といふ類ハ廣く異國をいふ故此器ハ唐山の製にてその形定りたるにもなきにや今新渡にあるをみるに竹にて造れり槽ハさしわたし三寸許の竹を長サ二寸五六分許ニ截たる筒の面に蛇皮を張たり柄も細さは竹を用蘭花なとちらしし彫たり弓ハ柄の長さほどありこれも清人を提琴と呼ものにいつくく異なれると馬尾にて糸をこする具音りは皇たるとなし具形竹のうちまし此如し又一種槽を

木にて作り面は方にして裏は圓く其さま團服如二半瓠榼一と
謂ふべし椀の如く中をくりたる面に蛇皮を鞔り摩に
は馬尾をもと用ゐ今は細き竹に松脂の粉をふりかけて以
摩に其音同じ秇苑日渉潘之恒絃子記曰余與二呉門張聘夫一
交ル具父子ニ于三代之間一毎為二醉心一焉祖野塘以二琵琶一標持ス父小
塘以二提琴一擅レ誉今聘夫以二三絃一鳴とある提琴これなりまた
秋評新語に拉二胡琴一唱二秦腔一といへるも鼓弓をやや古へより
琵琶をのみ胡琴といへども例をもていへば是も又胡琴
なり享保のころまではもてあつかふこと希なりしかし
貞享頃はいやしく賤きものとして有しと見えて人倫訓蒙

圖彙には物もらひの部に小弓引伊勢會の山より出る此
處のもの一風あるよし云々物もらひに種ありといへ共小弓引
編木摺はすべて下品の一属なりあるいは前に見ゆる
季吹府内伊勢踊に鼓弓ひくといへる是なりかゝる物も
ありて其頃は賤者などもる業とせる者なかりしと見ゆそのか
みさびうり節にあはしなうみゐはあらば上に引ぬるをどけ
考ふ然し三絃とおなじなどゝそのなれば好む人もくな
りしなり